HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大切な奈津子さんに捧げる
Author(s)	サトパエフ, ドスム; 宇山, 智彦//訳
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 35-37
Issue Date	2022-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.18.35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91620
Type	journal article
File Information	JB18_003satpayev.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

追　悼

大切な奈津子さんに捧げる

ドスム・サトパエフ
訳：宇山　智彦

人生は計画することができない。だからこそ、予測不可能で興味深いのだ。人生には常に偶然の出来事と偶然の出会いの余地があり、私たちの生きる道を魅力的なものにしてくれる。そして、さまざまな出来事と人々についての豊かな思い出は、この世での滞在の最後まで私たちと共にある。まさに「偶然」が、2000年代初め頃、まずはすばらしい学者として私が認識し、後には真の友人となる人を、私と引き合わせてくれたのだ。

それは、カザフスタンで政治・社会・経済が激しく変化し、それらの分析という領域がこの国でダイナミックなものになっていた時期だった。その頃、奈津子さんはカザフスタンの政治システムの形成過程と、そこに含まれる微妙なニュアンスや難問を研究していたので、私たちが開催する多くの専門家会合やラウンドテーブル、会議などに積極的に参加していた。

当時は、あらゆる変化や事件のダイナミズムを、理論的・応用的な政治研究の学問的な実験場としてとらえられるような、興味深い時代だった。まさにこの時期、カザフスタンでは、独立した分析業界が形成され、政治学の発展の基礎が作られ、職業的な専門家集団が形成されつつあっただけでなく、市民社会が活発に成長しつつあった。こうした集団の中で、奈津子さんは同僚、パートナー、友人であり、身内のような人になった。多くの専門家、ジャーナリストや政治家が彼女のことを知り、尊敬していた。カザフスタンの専門家集団にとって彼女は、真実と客観性を最優先するプロフェッショナリズムと研究倫理を体現する存在だった。それゆえに彼女の学術論文、インタビューや著書は高い関心を呼んできたし、これからもそうであろう。

たとえば、カザフスタンの闇市場と腐敗に関する岡奈津子さんの奥深い分析は、この難しいテーマの研究に大きな学問的貢献をなすものだった。これについての彼女の最初の論文、「ポスト・ソヴィエト・カザフスタンにおける非公式な支払いとコネクション」は、*Central Asian Survey* 誌で2015年に発表された。「売りに出される成績評価と学位：カザフスタンの教育部門における非公式な取引」と題する2番目の論文は、2018年に *Problems of Post-Communism* 誌で刊行された[訳注1]。教育システムにおける著しい腐敗がこの国にもたらす大

訳注1　この論文は同誌の2019年第5号に収録されたが、オンラインでは先行して2018年に発表された。

きなリスクに関する彼女の結論は、現実の事態と完全に一致している。学問的な仕事の中で奈津子さんは、腐敗した闇の関係の、現存するメカニズムを明らかにしようとしただけではなく、ソ連崩壊と急速な市場経済化の相互関係を解明しようとした。これらの現象は、普通のカザフスタン人の生活様式、人間関係とメンタリティを変化させていた。なぜなら、市場経済化改革の結果、ソ連的なブラート[訳注2]は金銭化したからである。

少し後になって、この相互関係をより詳しく明らかにする、カザフスタンの腐敗に関する本格的な学術書が日本語で出版された。私が日本に出張した時に、奈津子さんが誇らしげにこの本を贈ってくれたことを、私はとてもよく覚えている。この本が彼女の別れの贈り物となり、日本酒や日本のすばらしいビールを手に長時間親しく会話をする私たちの習慣が、永久に過去のものになってしまうとは、誰が予想できたろう。奈津子さんがカザフスタンに来るたびに、また私が日本に行く時にも、私たちは必ず会うのが古き良き習慣になっていたのだ。カザフスタンでは私の家で、家族と一緒に会うこともよくあった。日本では共通の友人であるミキさん[訳注3]も時々加わって、親しく楽しく話をしながら、昔のことを思い出し、その時の状況を議論し、今後の計画を立てたのだった。

まさにそうした会合の一つで、日本に関する本、それも観光案内ではなく、普通の日本人が生まれてから死ぬまでの生活と習慣を知り、理解するための助けとなるような本を、カザフスタンで出版しようという考えが生まれた。奈津子さんはすぐにこの考えを気に入り、支持してくれた。2015年の末、彼女は著者として、私は出版者として、この仕事に取りかかった。『もう一つの日本：茶の湯のない生活』と題する本のプロジェクトに一緒に取り組んだ半年間は、とても楽しく、満足のいくものだった。本の構成と内容を一緒に検討し、自分たちの家に保管している中から写真を選んだ。2016年の秋、本は文学プロジェクト「ソズ[訳注4]」の一環として、私の文化･啓蒙基金によって出版された。奈津子さんがこの本のプレゼンテーションのために、どれほどの喜びと動揺を感じながらカザフスタンに来たかを、私は覚えている。まずアルマトゥで、次にアスタナで行われたプレゼンテーションには多くのカザフスタン人が来場し、この本は大きな関心を呼んだ。これは驚くべきことではなかった。最も興味深い国の一つに関する、日本人自身の著者による本が、カザフスタン人のために、独立後のカザフスタンの歴史上初めて出版されたのだから。奈津子さんはこの謎めいた世界への扉を開き、日本を私たちにとって一層身近な存在にし、多くの人にこの国を訪れたいという気持ちを起こさせた。数年経った今も、この本は、カザフ人の魂を持つ日本人と、日本を愛するカザフ人の友情あふれる協力と創造的な意気込みの記念として、私の家の書架で重要な位

訳注2　入手しにくい物やサービスを、正規の方法以外で手に入れるために使われるコネ。ロシア語の原綴は блат。

訳注3　ロシア NIS 貿易会ロシア NIS 経済研究所の輪島実樹氏。

訳注4　「言葉」を意味するカザフ語。原綴は Сөз。

置を占めている。

奈津子さんの悲劇的な逝去の後になって初めて、彼女は私個人にとって、謎めいていると同時に近しく親しい「もう一つの日本」そのものであったということに気がついた。彼女のカザフスタンの友人全員にとっても、私の家族にとっても、彼女は外国人ではなく、親戚のような心を持った身近な人だったのだ。

ちなみに、2021年1月生まれの私の末息子は、生まれた時から私の腕の中で揺られながら、日本の枕の上で寝ていた。これは、奈津子さんが2016年に自著のプレゼンテーションのためにカザフスタンに来た時にくれた、すばらしい贈り物である。この贈り物をもらった時、これが私たちの愛する奈津子さんとだけでなく、私たちの第三子の生後最初の数か月と結びつけて永遠に記憶され、家族の神聖な宝物の一つになるとは、誰も知り得なかったろう。私は今でも、このことを奈津子さんに話すことができなかったのを残念に思っている。我が家の食卓を囲んで次に会う時に話すことができるだろうと思っていたのだ。しかし、そのようにして会うことはもう二度とできなくなってしまった。何事も、先延ばしにしたり後回しにしたりせず、適切な時にやることが本当に重要だ。大事にし、愛し、尊敬している人に適時にものを言い、笑いかけ、そして単に会話することが。人生が儚く短いことを忘れないようにしよう。奈津子さんは、20年前に私の前に現れた時と同じく、思いがけず突然に去ってしまった。去ったとはいえ、温かく、懐かしく、永く残る思い出を置いていってくれた。どうか安らかに！

（カザフスタン・リスク評価グループ）